感

せ給と也、

〔增鏡十六久米のさら山〕隱岐よりは、たまさかの御消息などのかよふばかりにて、〔後醍醐中略〕かしこにまいり給へる内侍三位〔後醍醐後宮藤原廉子〕の御腹にも、みこたちあまたおはします、いづれもいまだいはけなき御程にはあれど、物おぼししりて、いみじう戀聞え給ひつゝ、おり〳〵はしのびてうちなきなどし給ふ、おさなうものし給へば、とをき國まではうつしたてまつらねど、もとの御うしろみをばあらためて、西園寺大納言公宗の家にわたしたてまつる、八になり給ふぞ御このかみなりむかし、北山におはする程、夕ぐれのそらいと心すごう、山風あらゝかにふきて、常よりも物かなしくおぼされければ

庭松綠老秋風冷　薗竹葉繁白雪埋

つく〳〵とながめくらして入あひのかねのをとにも君ぞこひしき、おさなき御心にはかなくうちひそみ給へる、いとあはれなり、〔又見太平記〕

〔伊呂波字類抄加人事〕感カムス

〔倭訓栞前編六下加〕かまけ〔中略〕感をよめるは、日本紀靈異記などに見えたり、今俗事に打かゝり居るを、かまけてゐるといふ意近し、

〔日本書紀十四雄略〕六年二月乙卯、天皇遊乎泊瀨小野、觀山野之體勢、慨然興感歌曰、擧暮利矩能、播都制能野磨播、伊麻拖智能、與慮斯企野磨、和斯里底能、與盧斯企夜磨能、據暮利矩能播都制能夜麻播、阿野儞于羅虞波斯、阿野儞于羅虞波斯、於是名小野曰道小野、

〔日本書紀二十四皇極〕三年正月、輕皇子〔孝德〕深識中臣鎌子連之意氣高逸、容止難犯、乃使寵妃阿陪氏淨掃別殿、高鋪新蓐、靡不具、給敬重特異、中臣鎌子連便感所遇、而語舍人曰、殊奉恩澤、過前所望、誰能不使王天下耶、